

### 大学図書館講演会 (2002年12月13日) 講演要旨

## 学術情報の電子化が意味するもの：研究者の立場から考える

慶應義塾大学文学部 倉田 敬子

### 1 電子メディア時代

今回の講演は「学術情報の電子化」を考えるものですが、その背景として、電子メディアが普及する時代とはどのような社会であるのかをまず考えてみます。これまでの人類の歴史を情報メディアの変遷という観点から考えた場合、多くの場合以下の3つの時代に区分されます。

	時代変遷	感覚	知識の伝達
1	声の文化	聴覚	人間の記憶
2	文字の出版	視覚	テキストへの固定
3	電子メディア	全感覚	流動的なデジタルデータ

声の文化とは、文字がなく、情報を伝達し知識や文化を後世に伝えるためには人間の記憶に依存するしかなかった時代です。人の記憶に残るような表現を取らざるをえず、リスト・図表といった形式は存在せず、複雑で抽象的な思考の伝達は不可能であったと考えられています。

人が文字を持ち、さらにその記録された情報を印刷して伝達できるようになることで、情報伝達は視覚に依存してなされるようになります。知識が本という「閉ざされたテキスト」に固定されて伝達されることにより、知識とは完結したものであり、本という情報メディアで伝達



されるものに対する信頼性が生まれます。本とは著者が最初から最後まで書くものであり、本を書く著者に対しても、権威が生じることとなります。

インターネットに代表される電子メディアの場合、情報は文字だけでなく、音声も画像も含めて表現し伝達することが可能です。また記録されたものが伝達されるので、保存されないわけではありませんが、本質的には流動的なものです。印刷物が紙という物理的な媒体に固定されることにより完結し、一度出版されればその内容が変化することがないのに対して、WWWはいつでもそのデータは更新可能であり、いつ何が更新されたかを正確

## Contents

学術情報の電子化が意味するもの：研究者の立場から考える	1
トマス・リードの草稿研究とイギリス貴重図書館事情	4
Plagiarism：レポート剽窃との闘い	7

地域貢献特別支援事業費(文部科学省)及び学内教育研究改革・改善プロジェクト経費をうけて行われるプロジェクトと特別展・講演会	7
2003年春季特別展・講演会のご案内	8
彙報	8

に把握することは不可能です。

現在は、社会において情報や知識を伝達する情報メディアが、過去400年に渡って支配的であった印刷物から電子メディアへと移行しつつある、まさに過渡期といえます。このような根本的な情報メディアの変容は、単なる技術的な問題ではなく、私たちの思考のあり方、認識の枠組みをも変え、社会制度そのものの再構築をせまるものとなります。歴史は常に重層的なものですので、印刷物がすぐに消滅することはなく、現在の大学や出版社、図書館といった社会制度もそう簡単に無くなることはないでしょう。しかし、その役割は大きな変革を余儀なくされることは間違いありません。

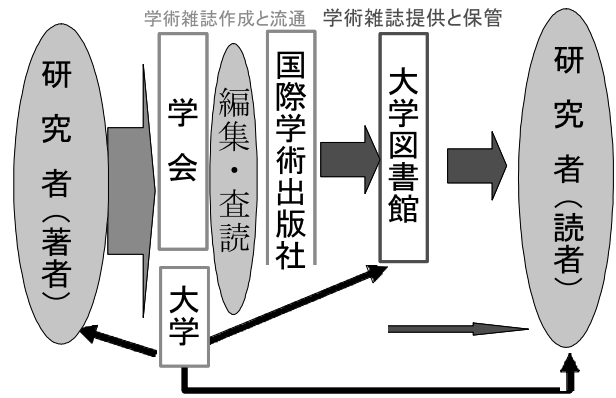
## 2 学術情報流通の特徴と学術雑誌の位置づけ

学術情報流通は、生産者も利用者も研究者という専門家同士でなされるため、その生産から利用までのサイクルは閉鎖的なものです。また、一つの研究成果についての情報が常に多様な情報メディアを通して、重複して伝達されるという特徴も持っています。それら多様な情報メディアは、一般にインフォーマルコミュニケーションを形成するものと、フォーマルコミュニケーションを伝達するものとの2つに大きく区分することができます。

インフォーマルなコミュニケーションとは文字通り、研究者同士のプライベートな情報交換・伝達で、迅速なことが必要で、情報の正確さや信頼性は二の次、という性質を持ちます。逆にフォーマルなコミュニケーションは、多少遅くとも、正確で信頼できる情報の伝達を担う役割が求められます。

このフォーマルなコミュニケーションの中心となるのが、学術雑誌です。学術雑誌が、フォーマルなコミュニケーションとして特異な地位を築いているのは、インフォーマルなコミュニケーションのような特定の狭い範囲ではなく、世界中の研究者に広く研究成果を伝達できることと、査読制によって一定の評価を得た論文しか掲載されないということによります。特に査読制の存在によって、研究者の業績評価が学術雑誌論文を中心になされるという現象を生み出すことになり、研究者は基本的に研究成果を必ず学術雑誌へ投稿するという風潮が、定着していきました（当然分野によって異なりますが）。

学術雑誌の生産、流通、利用の現状を図示すると以下のようになります。著者としての研究者が論文を学術雑



誌に投稿するところから始まり、それが編集委員会を通して査読され、編集され、雑誌として刊行されます。査読および編集作業も研究者が行います。学術雑誌の刊行は、主として国際学術商業出版社と学会によってなされます。学会が編集の主体でも、雑誌の製作・流通は商業出版社に委託するという場合もあります。

刊行された雑誌は、読者としての研究者に個人購読という形で渡ることもありますが（学会誌の場合はこれが多いでしょうが）現在では大学図書館が機関購読して、利用者に提供するというのが一般的です。個人購読料より高く設置されている機関購読料が学術雑誌の刊行の一部を支えているともいえます。学術雑誌の提供と保存という機能は、大学図書館によって担われてきたわけです。

著者としての研究者は、掲載された論文に対して経済的対価をもらうことはありません。逆に、ページチャージとして論文掲載料を負担することが、学会誌においては普通です。さらに編集や査読という作業に関しても、ごく一部の雑誌を除いて、経済的な対価はもらえません。研究者は通常大学に所属し、そこからの給料で生活するわけで、大学は大学図書館の親機関であるだけでなく、著者、編集者、査読者としての研究者をも経済的に支えていることになります。

現在、学術情報流通における電子化が大きな問題となっているのは、印刷物としての学術雑誌を中心に構築されてきたこのシステムが、電子化されてもなお基本的にはこのまま残るのか、根本的に変わるとしたら、どこがどういうふうに変わらざるを得ないのか、ということにつきると思います。

## 3 研究者の電子メディア、電子ジャーナルの利用

学術情報流通の世界は、社会一般におけるよりも、電

子メディアの利用が非常に進んだ分野と言われている。社会一般を見た場合には、出版社や新聞社が小説や新聞を印刷物として刊行しなくなり、電子メディアに移行するというのはまだ当分は無理であろうと考えられます。しかし、学術情報の流通においては既に電子化が急激な勢いで進展しています。

研究者が、比較的以前からコンピュータを利用しており、大学や研究機関でのネットワーク等のインフラの整備が進んでいたことが、背景要因として考えられます。1990年代後半のインターネットの普及により、研究者は電子メールやWWWを利用するようになります。たとえば、電子メールは多くの分野で、「毎日利用する」研究者が8割、9割を占めるようになっており、報告されています。単なる事務連絡だけではなく、議論のやりとりや研究データの交換、論文の草稿のやりとりなどに利用されています。WWWに関しても、研究活動を進めていく上で必要なさまざまな情報を入手するのに活用されており、情報入手のあり方が確実に変わったとする研究者もかなりいます。しかし、このような電子メディア利用の状況と比較すると、電子ジャーナルの利用は低調であったといわざるを得ません。

現在の電子ジャーナルの始まりは1994年であるとされています。1996年ごろ、大手国際商業出版社の多くが一斉に、著名な学術雑誌を電子ジャーナルとすることにより、その数は一気に増加しました。その後も毎年、倍々というペースで増加し続け、2002年には8千誌を超えたという統計もでています。

しかし、電子ジャーナルの大部分は、既存の印刷版学術雑誌が電子化されたもので、研究者が個人的に申し込むことができる雑誌は限られており、大手商業出版社はこれまで通り、大学図書館を通じての利用しか視野に入られていません。2001年以降、国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースが、大手商業出版社とのコンソーシアム契約により、多数の大学でのかなりの規模の電子ジャーナル導入を実現されたのは、非常に大きな意味があることです。日本においても国立大学図書館と大規模な私立大学図書館においては、電子ジャーナルが本格的に利用できる体制が整いつつあるといえるでしょう。

電子ジャーナルが実際にはどの程度、またどのように利用されているかに関しては、まだわずかな調査報告が

あるだけです。1999年に日本の物理学研究者に対する調査では、「使ったことがある」研究者で6割という数字でした。2001年4月の国立10大学での調査では、自然科学系教官の約7割が「月1度以上利用」と回答しています。人文社会科学系教官になると、この数値は15%程度にしかありません。

どのように利用しているかに関してですが、2002年に日本の化学者、コンピュータ研究者にインタビュー調査をした結果では、PDFファイルをダウンロードして紙に印刷するという利用形態がほとんどでした。また手近に印刷版の雑誌がある場合には、電子ジャーナルではなく印刷版の方をブラウジングするという結果もでました。

電子ジャーナルの利用に関しては、分野による差がかなりあるということ、一部の分野では利用が普及しだしているが、印刷版の代わりとしての利用にとどまっている可能性があることが指摘できると思います。

#### 4 今後の学術情報流通

現在の学術情報流通の電子化は、研究者個人によるインフォーマルなコミュニケーションはほぼ全面的に電子化され、一方フォーマルなコミュニケーションの代表である学術雑誌は、出版社主導で、大学図書館が印刷版も電子版も導入、提供することで成立しています。今後もこのような形が続くのかというのが、誰もが持つ疑問でしょう。現状維持のレベルは大きく二つあります。印刷版との並存がどこまで続くのかと、学術雑誌が主要な伝達メディアがありつづけるのか、ということです。

印刷版と電子版両方を支えていくのは、大学図書館にとっても出版社にとっても、負担であることは当然です。しかし、同じ学術雑誌というシステムであっても、印刷版から電子版へと完全に移行することは、単なる媒体の変化だけではなく、学術雑誌がこれまで担ってきた機能や役割にも、変化をもたらすこととなります。一番大きな問題は、アクセスおよび保存の永続性の保証です。印刷されることによって固定され、雑誌という物を保存しておくことによって、過去の学術情報は保存されてきました。今まであまり意識されてこなかった、学術雑誌の持つこの機能が、現在の電子ジャーナルにおいては保証されていません。電子メディアが、元々持つ流動的な性質を考えれば、当然のことではありますが、学術雑誌がこれまで果たしてきた機能が果たせなくなるとしたら、

大きな問題です。

学術雑誌が今後も、学術情報流通の主要なメディアであり続けるかどうかに関しては、当分の間はこのままではないかという意見が多くだされるようになってきています。その一方で、学術雑誌によらない電子的な学術情報流通の動きも一部には見られます。最も成功した例は、物理学分野を中心とする E-print Archive (米国ロスアラモス国立研究所から現在はコーネル大学に移管) です。

研究者が、学術雑誌に受理もしくは投稿する前の論文の原稿を、電子的なプレプリントとしてサーバに登録し、誰もがそこから自由に無料で利用できるというシステムです。学会も、雑誌編集委員会も、出版社も、図書館も存在しない、著者である研究者と読者である研究者とを直接つなぐシステムという点で、大きな関心を集めています。特に、高エネルギー物理学の理論分野の研究者においては、大部分の研究者が利用しており、登録されている論文数も、当該分野の学術雑誌論文のかなりの割合を占めるとされています。つまり、学術雑誌が刊行されるかなり以前に、そこに掲載される論文とほぼ同じ内容の論文を入手でき、しかも、個々の学術雑誌タイトルに関係なく自分の関心のある主題に関する論文のみをまとめて見ることも可能になっています。

E-print Archive が開始されたのは1991年です。利用者

数、登録論文数ともに着実に増加していますが、物理学、数学等以外の分野に急激に普及するということはありません。E-print Archive があれば学術雑誌はいらないという研究者もいません。それは査読制に基づく業績評価という役割を、E-print Archive が果たすものではなく、大学や学術研究分野における社会的評価が学術雑誌中心であることが変わらないことが大きな原因です。

E-print Archive 以外にも、学術情報を電子メディアとしてもっと自由な形で流通させるシステムは、試みられています。このような試みは、今後も増えつづけるでしょうが、現在の学術雑誌を中心とするシステムに、取って代わるようになるには、学術研究や研究者のあり方に関して、もっと根本的なところでの変革がなされる必要があるでしょう。大学というあり方も、研究者という立場も、そして図書館も、社会的な制度であるため、簡単に消滅するようなものではありません。一方、電子メディアの普及という時代の流れが止まることもないでしょう。古いメディアや社会制度と新しい電子メディア、この両者の相互作用とせめぎ合いの中から、新しい学術情報流通システムのあり方が生み出されていくものと思われます。現在まだ明確な姿が見えない、その新しいシステムを作り出すのは、現在の学術情報流通にたずさわっている私たちであることは間違いがありません。

## トマス・リードの草稿研究とイギリス貴重図書館事情

長尾 伸一

従来デヴィッド・ヒュームやアダム・スミスなど、同時代のスコットランド啓蒙の思想家たちに比べて、18世紀の哲学者トマス・リードについての研究は盛況だったとはいえない難かった。だがこれに対して70年代以後の英語圏、フランス、イタリアの学界では、リードに対する関心の復活が見られる。その背景には、最近の地道な資料研究の進展があり、それは今具体的な果実を結びつつある。

現在リードの母校アバディーン大学によって、同校所蔵の「パークウッド・コレクション」と呼ばれる自筆草

稿集成を中心とした、リードの自筆草稿や書簡を編集・出版する作業が進められている。アダム・スミスは遺言でほとんどの草稿の焼却を命じ、自らの思想形成史研究への道を永久に封印した。これに対してリードは無頓着に死後多くの草稿を残し、現在に至るまでそれらは、スコットランドのアバディーン大学やエディンバラ大学などの



貴重図書室に保存されている。じつは18世紀スコットランドの思想家たちの中で、リードは膨大な草稿を残した数少ない例の一つなのである。

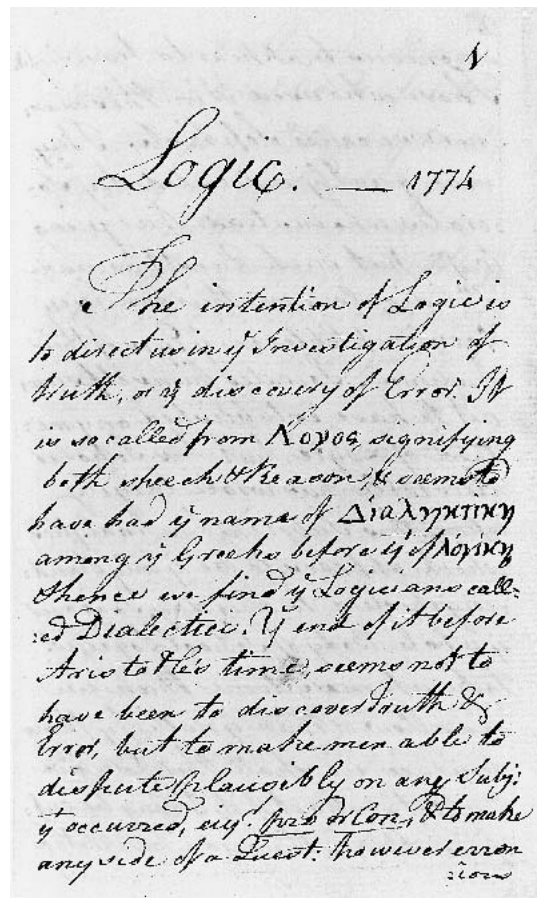
そのためこれらの草稿類はリード自身の思想史的研究だけでなく、18世紀スコットランド思想史の貴重な資料として、近年注目を集めてきた。80年代に構想されてから紆余曲折を経てきたこの出版計画は、既存の刊行本の新しい版と合わせて、ここ数年の間に『エディンバラ版リード全集』として、一部実現される予定である。それは従来百年以上前のハミルトン版のリプリントでしか読めなかったリードの著書を、読みやすい活字に新しい解説を付した形で提供するだけではない。この全集の刊行は、今までアバディーン大学やエディンバラ大学などの貴重図書室を訪れた、数少ない専門研究者しか見たことがなかった新しい資料を、広く読者の目に触れるようにするだろう。

従来のリードについて論文が書かれる場合は、公刊された主著の分析が中心となっている。だがこれらの未公刊資料を無視しては、現在のリード研究は資料的に成立しない。確かに生前に出版された3冊の著書に視野を限定するなら、通常幅広いジャンルで著作活動を行った18世紀スコットランドの思想家のうちで、リードはもっとも現代的な意味での「哲学者」に近い活動範囲を持った人物に見えてくるだろう。このコンパクトで必ずしも多産とはいえない著作リストからは、初期の哲学的著作に始まり、文化、政治、経済、宗教、歴史にわたる広範な著作を著したヒュームとは対照的に、リードは「専門家」的に哲学的研究に没頭していた人物であるという印象が生まれるだろう。

だが18世紀の思想家を対象とするなら、あらゆる知的生産物を活字にするという、現代の「産業」としての知的生産システムとはまったく異なった世界で彼らが活動していた事実を忘れてはならない。自己との対話である私的な覚書以外に、当時の発話行為にはいくつかの水準があり、それらのうちの複数の類型が「公共圏」に属していた。著作はその一つに過ぎなかった。著作は「一般読者」という、もっとも広範囲の受け手に向かった公的な言説だった。その他に18世紀の知的世界を彩るさまざまな討議団体で行われた、より限定され、知的に高度な受け手を目の前にした、「報告」という形での公表方法があり、そのためには通常、完成原稿が準備された。ある

いは結局出版されることがなかったスミスのグラスゴー大学での『法学講義』の独創性からもわかるように、「教科書」を出版する習慣がなかった当時の大学での講義は、たんなる教育のためのルーティン的な言説というより、しばしば著作として公表するためにはまだ十分な完成度を持たないという理由だけで出版されることがないこともある、教師の独自の、時には革新的な学説を展開する公的な場所でもあった。時には熟練した筆で書き残された教壇での講義は、肉筆で題名と目次を付され、製本されて、貴重な筆写本のように個人の蔵書として保存された。また専門学会が設立されていないこの時代の科学者同士の専門的な対話は、現代のように専門的な「ジャーナル」での公表ではなく、単なる学術的な往復書簡の形を取っていることがまだ多かった。

これらの多彩な18世紀的な知的「公共圏」での発話形態を考慮すれば、高度に制度化が進んだ知的世界で活動している現代の学者を論じるのと同様な手法で、公刊資



写真は受講生が記録したトマス・リードのアバディーン大学での「論理学講義」。記されている1774年には、すでにリードはグラスゴー大学に移籍していた。このノートを所蔵しているエディンバラ大学の貴重図書室は、講義ノートが後に書き写された際の年をあらわすと考えている。このような考証も優れた司書なしでは考えられない。

料のみに安易に基づいて18世紀の思想家の達成を議論することがどれほど危険であるかがわかる。そしてリードは実際に、私的な覚書から「著書」へと広がる、言説形態のさまざまな水準のすべてで、倦むことなく活動していた。リードの知的関心はヒュームに劣らず広範だった。それは公刊された著作のみを資料として描き出されてきた、既成の「リード像」の再検討を迫っている。

例えば現在残存しているリードの講義ノートを一見すれば、リードが学問のさまざまな分野にわたる該博な知識を持っていたことが判明する。リードの学問的思索は著作に結晶した哲学に関するものだけでなく、論理学、自然神学、自然法学や、さらには政治学、経済学にまで及んでいた。それはスコープの点でも、ヒュームやスミスの視野に劣るものではなかったのだ。さらにこれらに加えて、講義ノートに示されている自然科学の専門的な知識を考慮すれば、リードが自在に扱うことができた知識の範囲は、この分野についてはアマチュアの域を出なかったヒュームやスミスと比べ、より広大だったとさえ言えるだろう。確かに哲学的に類似した立場に立っていたケイムズやファーガスンなどと比べれば、リードははるかに精緻な哲学的議論を展開できた。とはいえ生涯にわたる知的活動領域のスペクトルを概観すれば、リードは現代的な意味での専門的な哲学者というより、自説に基づいて、森羅万象にかかわるあらゆることを論じることができたジェネラリスト的な学者の一人だった。当時「哲学者」と呼ばれた人々が扱った学問の全体は、ヘブライ語を操る専門家が担っていた教義神学を除いて、およそ現代的に見た理論的知識の全体を包括していたと言える。このカタログを総覧してみても、リードが不得意であると言える分野は、美学、芸術のみだったと結論づけることができる。それらについてさえも、自筆の草稿や学生の講義ノートが残されている。リードの未公刊資料は、刊行資料からうかがえる「専門的な哲学者」のイメージとは反対に、18世紀的な普遍的知識人の、知識のほぼ全分野にまたがった精力的な活動の痕跡を示している。著書として発表された彼の哲学的言説は、このような総体的な知的営みの一部を構成するものとして位置付けられた上で、研究されるべきだろう。

リードの草稿研究の第一人者であるポール・ウッドによれば、その一部が新しい全集に含まれるだろうこの未公刊資料の大半は、伝記的資料を除けば大半が自然科学

関係、それも多くが数学に関係した草稿や書簡である。この事実は次のような問題を提起している。かつてケンブリッジ大学に残されたアイザック・ニュートンの手稿を調査したJ. M. ケインズは、現代的意味での科学研究と比べてはるかに膨大な、錬金術や聖書研究などの痕跡を示す覚書の山に直面して、啓蒙の科学の英雄ニュートンはじつは最後の魔術師だった、と結論した。それと同様に、生涯の最後の時まで続いた数学、自然科学研究の営みの証拠は、リードを通常の意味での「哲学者」としてとらえることが妥当なのかという問いを、研究者たちに突きつけていると言えよう。カント以前の知的世界における哲学と科学の関係のあり方を再構成することなしには、これに答えることはできないだろう。

このように思想をそれが生まれた時代の中に再度埋め込んで解釈していくためには、草稿研究は現在では哲学史、思想史の不可欠の基礎的作業となりつつある。とはいえ、新全集で草稿のすべてを刊行できるとは思えない。おそらくそうならないだろう。そのため全集完結後も、まだそれらを所蔵している各地の貴重図書館を訪問して研究する必要はなくならないと思われる。

アバディーン大学はこの点について、一つの解決策を提供している。それはWEB上での高解像度画像による草稿の映像データの公開である。同校で3年前に開かれた国際リードシンポジウムに参加した際、筆者はそのサンプルを見ることができた。外国の財団の助成金を利用して行っていたこのプロジェクトは、データの多様な検索機能や、さまざまな図書館が所蔵しているリード関係の文献目録検索機能を付加している点で、本開発室のプロジェクトに似た、野心的なものだった。残念ながら資金的問題のためか、今現在それはまだ一般公開にはいたっていない。

というもじつはイギリスの大学は恒常的な資金難にあえいでおり、特に図書館が校費を利用してこのような企画を実現することが困難だからである。イギリスの大学図書館は優れたスタッフと熱心な研究による学術研究サービスによって有名であり、筆者も経験豊かな司書の皆さんの助力によって研究を行ってきた。それだけに、このような状況は嘆かわしいと言わざるを得ない。おそらくその他にもイギリス各地で、野心的で有用な企画のいくつものが、あまり進展しない状態になっているのではないだろうか。思想史研究という、一見先端的な情報技

術とは無縁に思える分野は、リードの草稿を例にとってみてもわかるように、むしろ研究自体の深化によって、それを他分野以上に必要としている。その点から言って、政府の財政政策や大学政策によってその進展が妨げられているように見えるのは、非常に残念なことである。

図書館職員の熱意の問題ではなく、制度上の問題のため、日本の大学の図書館は、とくに文献収集とそれに基づく研究補助の点で、イギリスの図書館にはるかにおよびない。筆者は本学図書館を除き、日本の図書館のスタッフや制度を賞賛した思想史研究者にかつて会ったことが

ない。しかし他方で、少なくとも本研究開発室は、独自予算によってアバディーン大学と同様な試みを実現しようとしている。それは大学や図書館の予算制度の相違が原因だと思われる。このように、それぞれの国や地方の事情に基づいて、図書館にはそれぞれの強さがある。それを生かし、インターネットを利用することで、国際的な図書館間のさまざまな協力によって、このような問題は乗り越えることができるかもしれない。本開発室で筆者は、その可能性を探っていきたいと考えている。

## 古今東西

### Plagiarism：レポート剽窃との闘い

教員にとって、学生に課したレポート評価は、いよいよ難しくなっている。従来から存在した「レポート剽窃」がインターネット時代になり、簡便かつ多様化したためである。こういった伝授は今では個人的なものから様変わりし、ネット上には多くの「カンニング用レポート」が掲載されている。

米国ではこれを Plagiarism と呼び、「米国大学における剽窃問題」と題するエッセイも出ている。

<http://www.rbs2.com/plag.htm> 図書館の世界でも情報源提供の基地として、この問題が取り上げられている。

全米有数の研究大学であるカーネギーメロン大学でも Plagiarism への対応に頭を悩ませているようで。図書館トップページに情報倫理問題と称したサイトを用意し、学生への訴えを行っている。

<http://www.library.cmu.edu/ethicsarchive.html>

バージニア大学のブルームフィールド教授は剽窃レポートを判別するプログラムを公開している。

<http://www.plagiarism.phys.virginia.edu/> 学生処罰に当たっては、もちろん学生組織の委員会も加わり、厳正な審査が行われる。日本における動向やいかに？

(逸村 裕)

## Topics

### 地域貢献特別支援事業費（文部科学省）及び学内教育研究改革・改善プロジェクト経費をうけて行われるプロジェクトと特別展・講演会

附属図書館研究開発室では、木曾三川流域治水史料の宝庫として知られる附属図書館所蔵高木家文書（総点数8万点以上）をはじめとする所蔵資料の整理・研究と活用を図るため、関連資料の調査や電子化等を鋭意進めているが、その過程で、「北高木家関係文書」の発見に遭遇することとなった。

北高木家とは、附属図書館所蔵高木家文書を伝来した旗本高木家の分家であり、維新直後に絶家となったため、関係史料も既に散逸したものと考えられてきた。しかし、ある個人宅で所蔵されていることがわかり、調査の結果、北高木家の文書を核とし、木曾三川流域治水史料を豊富に含むなど、本館所蔵高木家文書とは密接不可分な関係

にあることが確認された。目下、附属図書館研究開発室では、地域貢献の一環として、高木家屋敷遺構等の保存・活用を進めてきた岐阜県上石津町教育委員会とも連携し、歴史情報資源の保存と地域研究の活性化にむけて、調査・研究を進めているところである。

文書群の全貌解明には、いましばらく時間を要する見込みであるが、幸いにも今年度新設された地域貢献特別支援事業費（文部科学省）の対象事業に選定されたことを受け、この間の取り組みの成果をいち早く公開するとともに、こうした歴史情報資源の活用についても検討を行うべく、以下の展示会・講演会を企画した次第である。

なお、附属図書館研究開発室では、情報連携基盤センターとの連携のもと、電子図書館機能と従来型図書館機能を有機的に結合したハイブリッド図書館の構築をめざしており、情報コラボレーションシステムの研究開発費として、今年度の学内教育研究改革・改善プロジェクト

経費の配分をうけることができた。今回の特別展では、この経費により開発中の高木家文書を核とするデジタルライブラリーの試験公開（治水関係分、館内限定）を行う予定である。あわせて、多数の方々の参観をお願いしたい。

## 2003年春季特別展・講演会のご案内

### 特別展

「川とともに生きてきた

- 新発見史料・北高木家関係文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術 - 」

3月7日（金）～3月16日（日） 10：00～17：00（土日含む）

場所：附属図書館（中央図書館）4 F 展示室

### 講演会

- 地域資料の高度活用にむけて -

3月8日（土） 13：00～16：00

場所：附属図書館（中央図書館）5 F 多目的室

講師：秋山晶則（名古屋大学附属図書館研究開発室助手）

「北高木家関係文書にみる木曾三川流域治水」

溝口常俊（名古屋大学大学院環境学研究科教授）

「甦る地域空間 - 尾張と美濃の近世・近代 - 」

逸村 裕（名古屋大学附属図書館研究開発室助教授）

「大学と地域社会 - 情報資源コラボレーションの可能性 - 」

主催：名古屋大学附属図書館、附属図書館研究開発室

後援：岐阜県上石津町教育委員会、愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会

三重県教育委員会、名古屋市教育委員会

問い合わせ先：TEL052 - 789 - 3667 附属図書館情報管理課庶務掛

E-mail：shomu@nul.nagoya-u.ac.jp

### 彙報

2002年

9月30日 第5回教官会

10月21日 第6回教官会

11月18日 第7回教官会

12月13日 大学図書館講演会

12月16日 第8回教官会

12月17日 第1回懇談会

2003年

1月20日 第9回教官会

### LIBST Newsletter No.2

編集・発行

名古屋大学附属図書館 研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052(789)5699